



Management System News

INTERNATIONAL QA INSTITUTE (国際品質保証協会)・ISO-MS 研究会

巻頭に寄せて

会長 三浦 昭夫

CQA/CQE/CQManager/CRE/CSSBB



2005年5月シアトルで開催されたASQ年次大会開会式

目次

巻頭に寄せて	1
取材先で思うこと～エエッそうなの？	2
エコアクション21- その光と影	3
第3分科会 2005 合宿	4
私の修行とISO	5
ASQ/CQA試験と私	6
失敗から学んだか？	7
事務局から	8
編集後記	8



前号では昨年末のスマトラ沖地震による大津波に触れざるを得なかったが、今年の夏には日本、中国、韓国での大型台風とアメリカでのハリケーン、さらにはフランス、スイスほかヨーロッパ各地での大洪水と、天災による被害が連発した。被災者の方々にはひたすらお気の毒と申し上げたい。近年、自然災害の規模と頻度が益々上がってきている。たまたま先日テレビで見た教育番組によると、富士山の数十倍の爆発力があるというアメリカ北部の大きな火山が噴火周期上の予定時期を過ぎて既に4万年で、いつ爆発しても不思議ではないとのこと。そのため昔からの大予言による地球規模の大異変がよいよ間近に迫ったと思う人も多いようだ。一方、日本ではリスク管理は自然災害対策のことという誤った認識が益々ひどくなってきている。そこで、来る10月15日に当会の特別講習会で行う「品質・環境・安全衛生・TS16949すべて対応の統合管理」に関する私の講演には、リスク管理の正しい考え方を加えることとした。これについては巻末の「事務局から」のお知らせで案内しているが、一般の方々の参加も大歓迎である。

当会の対外活動としては、今年の5月にシアトルで開かれたASQ年次大会に論文審査委員という立場もあって出席した(左上写真)。会場内で色々な人から、ASQのインターネット質疑に対する私の回答を連日興味深く見ていると言われ、中には野次馬を撃退した応答などを話題にしてくれた人もいて、これには冷や汗が出た。質問者以外はどうせ誰も読んでいないであろうと気楽に回答していたのだが、あちこちで大勢が関心をもって見ているのでは、まったく油断できないと痛感した。最初に引き込まれたときは四面楚歌に近い状態だったのだが、やっと大分理解して頂けるようになってきた。近頃は「シックスシグマ」や「正しい改善」に関する応答、さらには、デミング氏の勘違いに起因する誤った認識を修正する回答も行っている。

国際品質保証協会は、QAに関連する活動を通して日本の繁栄に奉仕・貢献することを目的として1991年に設立された任意団体で、米国品質学会日本支部やIATCA援助会員として国際的にも活動しています。ISOマネジメントシステムの効果的活用について総合的な研究の目的で1992年に同協会を母体としてISO-MS研究会が設立され、今日まで協会が全面的にその活動を支援しています。

取材先で思うことへエエッそうなの？

システム規格社

月刊アイソス編集部 恩田昌彦

最近、取材などで感じたことを、思いつくままに紹介させていただきます。

ISO の効果は銭勘定をしては？

「これやってなんぼになるの？」—最近、編集部に新たに加わった T 記者がふと口にした疑問。ISO 業界外出身の同記者が、認証取得した企業を取材した後にはまず感じたのがこの点だという。ISO 関連の取り組みに関して、費用は割合つかみやすいですが、その効果(=成果)の把握の尺度はどうなっているのでしょうか。もちろん効果(=成果)を厳密に金額換算するのは難しいでしょうが、たとえ仕切値であっても“お金”を強く意識することが必要ではないでしょうか。

ISO 14001 では効果を金額換算している例もよく見かけます。さらに一步進んで事務局などの人件費などを含めた費用を把握し、収支を比べてみるのはいかがでしょうか。一方、ISO 9001 については「歩留まりが〇〇〇向上しました！」といった形で効果を把握しているケースを見かけますが、まずこういった内容を金額換算してみたいはいかがでしょうか。「“お金”を把握したところで何が出てくるか？」と問われますと、返答に窮しますが、何か次の展開へとつながるのはという気がします。

某 ISO 14001 認証取得企業で

「『改訂だ！〇〇が変わった！』と騒いでいるのは、アイソスさんなどその中身を知っている狭い仲間内だけのようですが……。この制度自体、蛸が一度入ったら抜け出ることができない いわゆる蛸壺化がますます進んでいるのではと強く感じています。昨年、ISO 14001 が改訂されたらしいですが、その結果、登録事業者にとって本質的な点で何が変わったのか……。簡単なことを専門家が集まってこねくり回して何か難しくしているような印象があります」

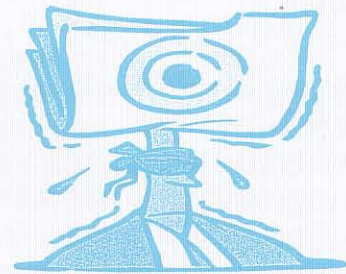
「ISO？それって何？？」、あるいはその名を知っていても、せいぜい「それってとるのが大変らしいですわね」というのが実情ですよ。「一事業者の立場から

この登録制度を眺めていると、制度自体の蛸壺化が益々進んでいるのでは、あるいは関係者がそれを望んで押し進めているのではと強く感じています」——という率直なご意見を某 14001 認証取得企業の取材現場でいただきました。この話をきいて、アイソス自身をさておいて感じたのが、企業内の ISO 事務局にもまさにあてはまるのではないかとということです。

企業で ISO のシステムを活かしていくには、事務局が ISO についてその内容を含め、いかにわかりやすく示し、社内に浸透させていく、ここが重要なポイント(もちろん他にもいろいろありますが)になるはず。アイソスを含め事務局ほか関係者には、ISO に関していかにわかりやすく説明するか、この役割が、今、求められているのではないのでしょうか。

審査(報告書)はだれのため？

取材で登録審査や更新審査に立ち会う機会がありました。そこで感じたのは、「審査(報告書)はだれのため？」という素朴な疑問です。例えば、審査員のコミュニケーションの問題。ある審査のトップインタビューの場で、社長他、役員が勢揃いして一人の審査員が向き合う場面がありました。審査員が質問を投げかけ、それに対し社長が答えるのですが、審査員はその内容を懸命にメモします。このメモに時間がとられ、次の質問までしばし間があくのです。そして次の質問でも同じような展開に……。はじめは緊張気味に座っていた役員の方々の表情が、しまいには「〇〇〇」となっていたのが印象的でした。



機関本部での判定会議や認証責任者による最終判断で現場メモが重視されるので審査員は一生懸命にメモを取るらしいですが、そのためにこうした状況が生まれるとしたら……。

このメモに限ったことではありませんが、“顧客”(お金を払う意味)の満足度を上げて行くようなやり方・仕組みについて、一個人はむろん、組織などの関係者などが加わって従来以上に議論することが、今こそ求められているような気がします。

エコアクション21ーその光と影

◆動き出したエコアクション21◆

会員 岩佐 允勝

○「旧EA21」から「新EA21」へ

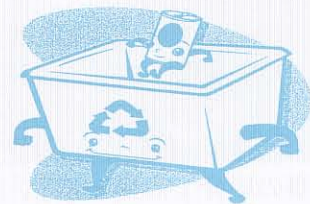
今年度より、環境省の「新エコアクション21」(以下EA21と記載)の認証登録がスタートした。敢えて“新”を付けたのは、「旧エコアクション21」が平成10年から開始されていたが、これは参加登録制度で認証審査はなく、「環境活動レポート」の提出のみで「参加登録証」が付与されていた。当初はISO14001の陰でその存在さえ知る企業も少なく、日陰者扱いされていたが、「グリーン購入法」の政府調達条件に、ISO14001及び環境報告書と共にEA21も仲間に加えられてから俄かに参加企業が増えだした。まさに“官には弱い日本企業”である。然し当時の参加制度は「環境活動レポート」で“PLAN”を示せば「参加登録証」が貰える仕組みであり、参加企業の活動が本物かどうかの保証は全くないものであった。いつの世にも悪い奴はいるもので、遂に「環境活動レポート」の“書き屋”まで現れ、ワンパターンの「環境活動レポート」まで登場してきた。また、時を同じくして、京都府における「KES」など、各自治体においても独自の環境活動への認証登録制度の動きを活発化し、乱立してきた。これに対し環境省は、EA21も企業に対し何等かのインセンティブを与え得るものとするため、制度の見直しを行い、「参加登録制度」から「認証登録制度」への切り替えを図ったのが「新エコアクション21」である。そのため、「(財)地球環境戦略研究機関(IGES)持続性センター」を統括事務局とし、全国ネットのための「地域事務局」がおかれ、認証審査を実施するための「EA21審査人」が選考され、審査が開始され出したと云うのがEA21の今日までの経緯である。

さて、EA21の中味であるが、構成は①環境負荷の自己チェック、②環境への取組みの自己チェック、③環境経営システム、④環境活動レポート、の4部構成となっており、①～③のPDCAを実行し、④の環境活動レポートを作成して、公表する運びとなる。ISO14001と比較して、内容的には自己チェックによる合理化と、落ち防止が図られる他には目新しいもの

はないが、④の「環境活動レポート」は企業の環境活動全般が公表対象であり、環境省が設置する「環境報告書データベース」に公表が可能であることは、今日の情報開示方法の在り方を示していると云える。

○「EA21」の抱える問題とは

EA21は中小、零細企業にも環境保全活動を根付かせる目的で策定され、普及を図ったものであり、これは現在でも変わりはない。大企業は環境負荷が大きく、厄介ものの作業は下請けに流し続けてきた。中小、零細企業は仕事が欲しいから、ヤバイ仕事でもこれを請負ったが、正しい管理のためのISO14001など“金なし、人なし、暇もなし”では取れる筈もなく、これでは日本の環境負荷は永久に減らない。行政としては、ISO14001に変わる「何か」を模索し、それがISO14001の中小企業版と云えるEA21となって実現した。したがって、現在のキャッチフレーズも「ISOの10分の1の金額で取得可能」と新聞等では報道している。また、仕事のない、有り余るEMS審査員有資格者達や、環境コンサルタント達もビジネスチャンス到来とばかり色めきたち、彼らの失業対策事業としても効果を上げるかも知れない。



しかし、現実とは言えば、取り組む企業の多くは親会社又は主要顧客からの指示・命令によるもので、“やらされる”意識から脱皮していない。また、費用の方もISO14001が価格破壊を生じているので、その差は1/3～1/2に短縮している筈である。普及には多くのサプライチェーンを抱える大企業の協力が必要不可欠で、指導や審査をする側も相当の覚悟で、ボランティア精神を発揮して臨まないと、この制度は頓挫するだろう。

一方で、ISOの審査機関はISO14001の取得件数が頭打ちの現状から、企業がEA21へ流れることを心配しており、その動向を注目している。また、環境における認証制度は対外的にも「ダブルスタンダード」となり、問題視する向きもある。EA21は国際規格ではないので、世界的には通用せず、この点では、ISO14001との、適切な「棲み分け」も必要であろう。(一部の企業では「一次下請けはISO14001、二次下請け以下はEA21でも可」としている。)

8ページにつづく

第3分科会 2005 合宿

IQAI 会員/ISO-MS 研究会幹事

井上 庫男

はじめに

第3回 ISO-MS 研究会第3分科会の合宿は、2005年7月2日(土)12:30から3日(日)12:00まで、湘南の海と富士山を望む葉山町湘南国際村にある生産性国際交流センターにおいて開催された。以下、その概要をまとめた。

計画段階

分科会として特別なテーマについての集中討議というものを都内の研修所で1日かけてすればよいと考えていた。しかし、一昨年(2004年)の箱根、昨年(2005年)の軽井沢での合宿に参加した会員の熱い要望に押されて、2月の分科会から合宿の計画が始まり、石原幹事を合宿担当に選任し、合宿の準備に入った。

一昨年(2004年)の「付加価値のある審査とは」(主として第三者監査)、昨年(2005年)の「効果的内部監査はどうするべきか」を踏まえ、本年は、「監査の生産性—何を求め、何を投入し、何をするのか—」(監査全般)をテーマとした。

宮崎前幹事の紹介で会場を選定。第3分科会以外の会員にも誘いをかけ非会員3名を加えた予定の20名の参加となった。参加者には1週間前に合宿詳細案内を、3日前には基調講演資料を送付した。

1日目:グループ討議

13:30 開会に際し瀧川副会長が今回の研修のテーマ「監査の生産性」について、研修の目的や監査の生産性についての考え方を紹介した。

13:40 配布資料に基づき「監査の本質及び生産性について」と題して三浦会長が基調講演。

14:40 3グループに分かれてグループ討議を行った。各グループは審査員、コンサルタント及び企業で働く現役の顔ぶれが均等になるように6~7人ずつに分かれて、司会、書記、発表者を決め、討議に入った。夕食後引き続いて各グループは、それぞれ自主的な討議を行ない、結果的にグループ全員が22:00過ぎまで参加して討議の内容を深め、翌日のまとめをその

日のうちに行なった。また、議論が不十分であることを感じていたCグループも別室でグループ討議を始め、全グループとも22:00過ぎまで討議の内容を深めた。

2日目:グループ発表と講評

9:00 各グループで発表用のまとめに入った。

10:30 各グループの発表。要点は以下のようなものである。

Aグループは、「監査の生産性」に関する入口論に重点を置いた内容で、社会と経営に貢献できるか否か、直結しているか否かが重要で、時間軸と経営上のリスクの視点を加える必要性も提示されたが、問題提起にとどまった。

BグループはISO19011に従ってインプットを少なくする観点で整理がされており、監査のプロとしての腕を磨くための模範解答的に方向性を示していた。

Cグループは、「監査の生産性」の定義に関する検討から、趣旨から遊離せず、社会性を持ちながら本質を突くというようなアウトプットの質、に重点を置いており、可能性のある事項に対して深く検討した内容であった。

11:40 三浦会長の総括。概要は以下の通り。

- a) 「生産性のある監査=役に立つ監査」とは、トップと監査統括管理者の手腕と認識と才覚にかかっている。目先、短期、中期、長期の生産性についての視点についても、トップが考えて監査の項目にしかるべく組み入れるべきであること。
- b) 「監査の本質」とは、正しく観察して査定することであり、問題点を無理に作り出すことではない。これもトップが本気になって取り組むことが前提。

有効性評価とむすび

合宿参加者の意見を基に、8月13日の分科会で合宿の計画から完了までの有効性評価を実施したところ、各グループ共、メンバーの個性や専門性が反映されて、それぞれ違った味があり内容的にも捨てがたいアウトプットが得られ、参加者の多くが満足感を味わったようであった。来年の合宿にもぜひ参加したいという人が多く、同じ頃(7月1日2日(土・日))同じ場所で開催する方向が確認された。なお、合宿の実施方法については今後、参加者満足と内容の濃い結果を得よう議論を深め、参加者の意見も具体的に取上げて検討して継続的改善も目指すこととした。

私の修行とISO

◆ この一年を振り返って ◆

ISO-MS 研究会 会員 今泉 邦正

滝場通い

私はいわゆる団塊の世代です。30年勤めた会社を昨年3月に退職し、現在、ある審査機関にお世話になっています。私の仕事は営業担当で、審査員ではありません。審査機関に入社と同時に、このISO-MS研究会に参加させていただくことになりました。また、同時期、ある友人から誘われ、“滝行”を始めました。毎週土曜日、もちろん冬の季節も滝場に通いました。そして1年があつという間に過ぎました。

今でも親しい仲間の会合に出て、近況を話せと言われ、ISO関係の仕事をしている話をしますが、あまり通じません。しかし、滝行をやっている話をしますと、何かザンゲしなければならぬことがあるのかと笑いながら真顔で聞き返されることがしばしばです。さらに、退職時、女房から別れると言われ、退職金を全額渡した話をすると、親しくしている文化人類学の教授に一句、川柳をひねられました。というようなことで、いい酒の肴になっています。

仏教の伝来を思う

“滝行”は修験道の修行のひとつですが、これは仏教と関係があるようです。また神道にも関連がありそうです。滝行を実行しているとき、実際、御真言を唱え、お経を唱え、また、祝詞(大祓い)もあげます。滝行の仲間たちと一緒に、宮崎の高千穂や岩戸神社、島根の出雲大社やその近くの薬師寺にもお参りします。神仏習合や廃仏毀釈という言葉を思い出します。

仏教は、紀元前500年頃にインドに生まれ、何百年か経過して、中国を経由し、日本に伝わりました。仏教が最初日本に入ってきたとき、もともといた日本の神様は、仏様の家来になったようですが、仏教は寛容な宗教のようで、そのうち同格になったようです。それから千数百年が経ち、今では、日本人が外国へ入国のとき「宗教は？」と聞かれ、「無宗教」と答えてしまい、習慣にも言葉にも仏教に起源があるものが多いことを考えると、これはおかしいという気がするのです。本来は仏教徒(神仏教徒)と答えるべきではない

でしょうか。かなり大雑把で間違いだらけかも？と思いつつ、仏教伝来をこんなふうに理解しています。

明治になって信教が自由になり、百数十年経過しました。でも日本は、今でも仏教国ではないかと思えます。工場の一角やビルの屋上に、商売の神様か、安全の神様か、よく稲荷神社が祀ってあります。これは日本社会に根付いていると言っているのではないのでしょうか。そう言えば、“滝行”では、お稲荷さんの御真言も唱えています。そのほか、不動明王さま、弁財天さま、毘沙門天さま、役の行者さま、お地蔵さま、文殊菩薩さま、観世音菩薩さま、薬師如来さま、インド、中国、日本の神様たちの御真言も唱えています。

子供が生まれて神社参拝、子供の結婚式はチャペルで、あの世はお釈迦様のお世話になる、しかし普段は無宗教、節操がないとも言えますが、救われると思えば、何(誰)でもいいだらうと思うのです。



研究会は心強い味方

ISO-MS研究会も2ヶ月に一度土曜日に開催され、毎度、出席しています。研究会に参加させていただようになった当初は、ISO規格については、まったくの新人でした。メンバーの皆様には申し訳ないのですが、研究会へは、いわば門前の小僧の心境で参加していたことになります。この小僧が生意気で(好奇心が強いと思ってもらえると嬉しいのですが・・・)、「本来、監査制度は日本の企業社会に馴染むのでしょうか」、「ISO規格の日本語訳の意味はよくわからないのですが」など、とんでもないことをすまし顔で言うので、今でも、会のリーダーを相当困らせているに違いありません。

しかし、私自身は、仕事上で、どう解釈したらよいか迷ったときなど、研究会は心強い味方です。次回例会では、こんなことを聞いてみようと思いつきながら、メンバーにお会いするのを楽しみにしています。

ASQ/CQA 試験と私

会員 石原 隆昌 CQA

はじめに

失敗と観念していた 2005 年 6 月の CQA (ASQ 公認監査士) 試験に合格できた。手元に、1996 年 12 月分から 1999 年 12 月分まで 6 回分の ASQ からの試験結果の分析データ付きの不合格の通知がある。最初の試行から 8 年半、直近の受験から 5 年半である。大勢の IQAI と MS 研究会会員の方々からお祝いの言葉を頂いて、感謝の気持ちで一杯である。

当方、CQA は「挑戦対象」というよりも、仕事と趣味の中で付き合ってきた「先輩」みたいな感覚であった。このように間延びした話であるから、「受験」とか「挑戦」とは程遠く、あまり役に立たないかとは思いますが、実務との関連で経緯と体験談を述べさせて頂く。

経緯

点数の推移と当時の自己分析は以下の通りである (700 点満点、合格: 変換総点数: 550 以上)。

	変換総点数(割合)	正答数/問題数(正答率)
1996.12:	370 (53%)	79/155 (51%)
	2/3 弱の解答で時間切れ(こんなものかなあ...)	
1997. 6:	490 (70%)	101/155 (65%)
	全部埋めたが 2 割は苦しまぎれ(もう一息!!)	
1997.12:	450 (64%)	98/155 (63%)
	あれ、なぜ下がったの?	
1998.12:	510 (73%)	99/150 (66%)
	手応えあり、ぎりぎり合格との勝手な期待→残念	
1999. 6:	430 (61%)	92/150 (61%)
	審査経験も積んだはずなのに→甘かった	
1999.12:	510 (73%)	108/150(72%)
	今度は合格を期待→惜敗ではない不合格 根本原因は根が深い→「一時中断」を決めた	

なぜ不合格だったのか?

1999 年 12 月の ASQ からの通知 (変換総点数と 5 つの基本項目ごとの本人の正答数と合格者の平均正答数が報告される) で原因を分析した。全体の必要点数 79% 以上に対し当方は 73%。合格者正答率の平均 81% に対し当方は 72%。以下、5 項目の分析である。

1) 監査の腕前: 合格者平均よりすこし上 (現役審査員としてはこれでは低すぎる...)。

- 2) 倫理規定 (プロとしての行動・課題) 及び監査実施計画管理: 合格者平均正答率より少し下 (審査員実務に埋没しすぎだったのかも...)。
- 3) 監査準備: 上記 2) と同様。
- 4) 監査報告・是正処置・フォローアップ・終結: 合格者平均正答率の 50% (これは情けない...)。
- 5) 知識全般・技能: 合格者平均正答率 88% に対して当方は 75% (点数の稼ぎ場所なのに...)。

そして、次のような根本原因に行き着いた。

- 1) 「本質の理解」が本物ではない。
- 2) 3) 4) 「監査」全体を見ていなかった (当方の思いとは別に、冷徹な事実は受け入れざるを得ない)。
- 5) 「知識全般・技能」で、過去の知識の錆びつき。全般的には、キーワードの理解が不十分。専門語が日常用語になって出題されると理解に時間を要した。

そのために何をしたか?

- 1) 現役審査員の利点を生かすこと。また、「CQA Primer」と「CQA 試験講習会教材 (三浦昭夫講師)」を極力参照して、常に本質と原点を確認する。
- 2) 3) 4) 審査員実務に埋没せず、常に監査全体を考慮する。
- 5) 「知識全般・技能」は、時間をとって集中的勉強。全般的に、キーワードを勉強し直す。
 - a) 審査報告書 (幸いにも英語が「正」) では、「定型的」ではなく、「生き生き」表現を心掛ける。
 - b) 規格の自分での訳を試みる (MIL-Q-9858A、ISO9001:2000、ISO14001:2004 で実施)。
 即ち、本質を理解し審査に生かし、審査報告書で表現力を高め、そのために英語原文を活用する。

狙いはどの程度/範囲まで達成したか?

主任審査員コース修了で審査の入口をくぐり、三浦会長の監査実習で真髄を体験し、その後の審査の実務的な部分を「CQA Primer」と「CQA 試験講習会」(三浦昭夫講師) で学び、折に触れこれらを紐といて「実務での指針」とし、試験で現状の仕事を「チェック」する、というのが CQA 試験との係わり合いであった。意図した活動はある程度は達成でき、また、CQA 合格という客観的指標で「意図した結果」も得られた。

英語での受験を強く薦めて頂いた会長にも感謝するが、CQA 試験を受けること自体が毎度勉強になった。今後は自分なりの新たな指標を設定し、さらに審査員としての研鑽を続けて行く所存である。

失敗から学んだか？

◆ 友人を殴った苦い思い出 ◆

ISO-MS 研究会 会員

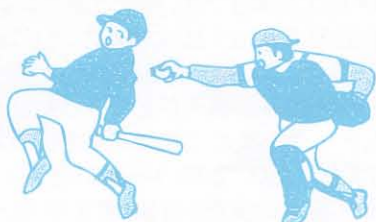
多田 和夫

高校野球の事件を聞いて

今年の夏も高校野球が若者らしい爽やかで真摯なプレーで大いに私たちを感動させてくれたが、残念なことに明德義塾や駒大苫小牧の暴力事件が明るみに出て、また別の問題を提起してくれた。スポーツの基本である精神力・身体能力の向上にはハードトレーニングの別名を持つ“シゴキ”は不可欠のものである。この“シゴキ”に練習の合理性があれば、「愛のムチ」であり、恣意から発せられるものであれば、「暴力」と言わざるを得ない。昔のビンタが最近では腕立て伏せや50mダッシュ50回に形を変えただけである。

この精神力・身体能力を極限まで引き上げ、さらに瞬時の反応を可能にするためには気の遠くなるような反復練習が必要なのである。退屈な練習だけに誰しもがその基礎練習を嫌がる傾向にある。従って指導者は「愛のムチ」を振るうことになり、選手自身も自己管理ができないため、「自ら望んで」「シゴキ」を受け入れることになる。指導者と選手の間信頼関係が構築されていれば、どんなにきついトレーニングでも選手は喰らいついて行くようになる。

ハードトレーニングも指導者と選手との信頼関係がうまく噛み合えば良く、レギュラー選手は試合に出場するという名誉が待っている所以我慢もする。ところが補欠にも入らない所謂「タマ拾い」としては、日常の練習を黙々と続けるのは本当に困難なことなのだ。



私も部活で同級生を殴ってしまった

私は団塊の世代であったので、中学への入学は新設校であった。バレーボール部に入ったが、第一期生であるため全員1年生でありながら、熱心な監督の指導成果もあり、一軍は市内の中学校大会で優勝した。ところが2年目を迎えて、あまりに厳しい練習から

監督に対して不満が噴出して監督は辞めてしまった。私は1年生から引き続きキャプテンを務めたが、クラブ強化の责任感から監督になり代わってハードトレーニングを部員に強制した。しかし、上級生でも一軍に入れないままに厳しい練習を毎日続けることに耐えられなくなったS君を前後の考えも無くカッとなって殴ってしまった。

「スポーツマンで勉強の出来る」と自惚れて自我の強い私は事件後1か月も人の気持ちを傷つけたことに気づかずいた。周囲の雰囲気から感ずるところがあつて反省してみると、報いられないであろう厳しい練習に友人がどのような気持ちで黙々と取り組んでいるのかも斟酌なしに、ただ自分の感情だけで他人に暴力を振るって傷つけてしまったことはなんと非道なことかを知った。また、自分をコントロールできない情けなさを痛感させられた。その結果、「決して感情で相手の人を殴ってはいけない」と肝に銘じたものである。

中学を卒業して40年、このバレー部は毎年欠かさずに飲み会をやっている。S君は高卒で日本を代表する航空会社に入社して3年後にはロンドン駐在員となり、帰国後は夜間大学に通学する傍ら、仲間のために第一組合でがんばり抜いた。今では地上勤務者を対象にした教官となっている。その飲み会で集まるたびに、コップ酒片手に曰く「多田くん、キミが僕を殴った後、『ゼツタイに感情で殴らない(指導しない)』の一言を今でも覚えているよ、僕も同じ指導方針さ」とこれまた同じことを毎回言う。あの時の一発がいまだに毎年私に逆襲してくるのである。

未完成は人の常なり

このように精神的に未熟で感情をコントロールできなかった私が先日桂離宮を訪れた。世界の要人が一様に感心するのは、この江戸時代初期の純日本風の建物や庭園はもちろんのこと、離宮内にある笑意軒の外壁にある窓の格子が一部意図的に未完成になっており、これが「未完成は人の常なり」を説明しているとのことにある。それを見て、なにやら救われた気持ちになったのは私だけではなさそうである。

桂離宮の暗示を待つまでも無く、経営者なり管理職として社員や部下を指導する際は、まず自分自身が「未完成の人」である、との認識を持つことが肝要であろう。私自身は恥ずかしながらまだまだそこまで到達できていないため、スポーツの反復練習のように心の中で「自分は未熟だ」と念仏のように唱えている。

ただの感情から発した指導と冷静な判断からの指導では、それを受ける側の吸収され方に雲泥の差が生じることは自明の理である。お互いに益々心掛けておくべきであろう。

3 ページのつづき

環境省は当初、中国や韓国における日本のサプライチェーンにもEA 21 を普及させる意向もあったようだが、“Japan as No.1”の時代ならともかく、今や、“Japan Passing”(日本素通り)又は“Japan Nothing”(日本無視)の時代では見向きもされないであろう。東南アジア急進国が国際化する中で「国内専用」に拘って、国際的な「置いてきぼり」を食わないよう願うことや切である。



◆◆◆ 事務局から ◆◆◆

【ASQ 年次大会】

“World Conference on Quality Improvement”
5月16日～18日 シアトル (USA) で開催。
IQAI から、三浦会長が論文審査員として参加。

【ASQ 資格試験】

- ◆ 2005年6月4日(土)(東京)
CQA (公認品質監査士) 合格1名
石原隆昌氏 (IQAI会員)
- CQE (公認品質技術管理士) 合格1名
Gary Wrightsman (神戸駐在アメリカ人)
- CQIA (公認品質改善推進者)
Robert Austenfeld (広島駐在アメリカ人)
- ◆ 次回の試験日程
CQManager/CRE/Six Sigma - 2005年10月22日(土)
(会場は、東京都目黒区 目黒住区センター)
- CQA/CQE/CSQE - 2005年12月3日(土)
(会場は、未定)

【特別講習会】

日 時: 2005年10月15日(土) 13:00-17:00
テーマ: 各種 MS 全規格の統合対応 (ISO 13485/
GMP/HACCP/TS16i49/環境/安全/リスク
管理/シックスシグマ等を含む)
場 所: 全国地球温暖化防止活動推進センター会議室
(東京都港区麻布台 1-11-19 神谷町ビル 2F)
定 員: 40名 (先着順で締め切り)

【ISO-MS研究会年次大会】

日 時: 2005年11月26日(土) 13:00-17:00
場 所: (財)日本航空協会 航空会館
(東京都千代田区内幸町)

(IQAI 事務局 小田宗隆)

編集後記

多田氏の「失敗から学んだか?」と今泉氏の「滝行」の記事は、直接的には当機関誌との関係が薄いようだが、妙に気になった。前者は、「共通の目的を持ってきつuitトレーニングに耐える時の指導者と選手の相互の信頼関係」と「指導者に必要な未完成は人の常なり」で、後者は「日本社会に根付く寛容な宗教」と「監査制度は日本社会に馴染むのでしょうか」という根源的な問いかけに、である。恩田氏の「取材先で思うこと～エエそうなの?」は、お金の面から ISO の審査の意味を問うている。

「ISO は一種の宗教と考えると分かりやすい」とはある人の弁。信念重視、価値の探求、価値成就と自覚、そして、実施するときの具体性を伴った解釈、その権威付け、実施と確認時のある種の統制、そして、流派の発生、一神教的か多神教的か、というようなことかと自分流に理解した。上記 3 氏は審査員ではない、いわば審査を客観的に見られる立場にある方々である。

後の 3 篇は、ISO にいう「確立」、「文書化」、「実施」、「維持管理」と「監査/審査」にどっぷり浸かった側である。「第3分科会 2005 合宿」では、監査/審査の価値を有効性の次の段階として生産性/効率(ある意味で「ごりやく」)の観点で討議している。岩佐氏の「エコアクション 21—その光と影」では、中小、零細企業の「金なし、人なし、暇もなし」への支援としての「エコアクション 21」が、大企業の協力と指導や審査する側のボランティア精神がなければ頓挫するだろうとの懸念、そして日本独自の基準が国際的に置いてきぼりにされる懸念を示している。因みに、「エコアクション 21」では、内部監査は「要求」ではなく「推奨」として「緩めの方向」であるが、一方、わが国の「ISO 活動」では、解釈と適用がおやっと思うような「厳しめの方向」と「拡大する方向」に進んでいる傾向があるようだ。これをどう見るのか、今後、国風文化と国際化との両睨みの構えが必要と思われる。

今回もテーマを決めて執筆を依頼したわけではないが、図らずも、「ISO 活動の根源の意味」、「生産性・お金」並びに「各々の文化:習慣・考え方」について触れているように思えた。
(石原隆昌)

発行人:国際品質保証協会 (IQAI) / ISO-MS研究会
IQAI 兼 ISO-MS研究会 会長 三浦 昭夫
Fax: 03-3712-3399; E-mail: miura@iqai.org
住 所: 周南市弥生町2-1 西原技術事務所気付

連絡先: IQAI事務局
小田 宗隆 koda@k-micro.com
Fax: 043-296-3285; E-mail: welcome@iqai.org
機関誌発行/頒価: 年 2 回/年間 1000 円